

反日武装斗争の勝利のために(1)

東アジア反日武装戦線“狼”部隊 の組織論的観点からの総括

(1) 反日武装闘争の組織論確立に向けて

われわれは、世界帝国主義の全面的根底的打倒——過渡期人類共同体の建設のために、世界革命の「党」「軍」を必要不可欠とする。しかし、われわれは建党から出発するのではなく、建軍から出発するのでもなく、世界革命「党」「軍」の原基形態たる反日戦闘細胞の創出から出発し、敵との具体的交戦という事実行為を軸にして「前線」「後方」を形成し、しかるのちに世界革命「党」「軍」を、その形式からではなく、実体内容から創出するのである。建党から建軍へ、あるいは建軍から建軍へという、具体的な戦闘の開始を後に後に引き延ばそうとする路線は、万

年能書屋であり永久待機主義者である諸君の自己合理化路線である。また、一定の路線に基づいて情勢分析を行ない、戦術・具体的活動方針を立案して組織的実践を行なう党の建設を否定する唯武器主義的な建軍路線も、一発主義的に破産し、その後は武装闘争を否定する転向を生ぜしめる。われわれは、あくまでも世界革命「党」「軍」の同時一体的な創出を追求するのである。

東アジア反日武装戦線“狼”部隊が、東アジアの、世界の、反日（武装）闘争、反世界帝国主義闘争の奔流の中に、日帝本国人としてのオノレの歴史的、現在の反革命性を実践的に否定して、主体的に合流するべく、一定の反日思想の形成と軍事技術的準備を積み重ねて、断呼として日帝本国内における本格的な都市ゲリラ戦としての反日武装闘争の

口火を切ったことはまったく正しかった。

“狼”部隊が、いつさいの日和見主義、待機主義を否定して、すみやかに反日武装闘争を開始したのは、被植民地人民からの搾取・収奪そして抑圧と犠牲を強いる上に「物質的豊富と政治的自由」を誇っている日帝本国人の日常性を一刻も早く解体しなければならぬと決意したからであり、そして戦闘のインパクトと連戦連勝の勢いこそが、新たな反日戦闘細胞を生み、日帝の息の根を止める戦いを構築すると考えたからである。事実、“狼”部隊の戦闘は、“大地の牙”部隊、“さそり”部隊を生み、戦闘過程の中で三部隊は具体的に連携した。そしてさらに、三部隊以外にも東アジア反日武装戦線に志願する戦士、部隊を生み、戦線を拡大したのである。

一定の反日思想の形成と軍事技術的準備を前提として、たとえ一人もしくは数人の規模であっても、日帝の政治・経済・軍事中枢を撃つゲリラ戦を開始し、そのことによつて自らをまず“狼”軍Ⅴの中核“反日戦闘細胞”として確立し、戦線を形成していくこと、これがわれわれの組織論的原則である。

われわれは自らの責任において反日武装闘争を開始する以上、勝利の日まで戦闘を持続する義務を負い、その戦闘結果に対して責任を負う。われわれは反日戦闘細胞として、最後まで責任をとりきる。そして反日武装闘争の勝利は、

前線部隊と非公然支援部隊との相互発展にかかっている。

それ故、反日戦闘細胞として自らを“狼”軍Ⅴの中核として実質的に確立した部隊は、敵にダメージを与える公然化した戦闘という物質力をテコとして、すみやかに非公然支援部隊の形成に着手しなければならない。つまり、実践経験があり、反日戦闘細胞と強い信頼関係をもっている兵士を組織工作者として合法の大衆諸戦線等に派遣し、新たな兵士と非公然支援員（準兵士）の組織化を行なう必要があるのである。（初期の段階では、原則として公然支援の組織化は必要でない。公然支援は、もし兵士が逮捕されたならば、その段階で救対を原則的に形成すればよい。その場合、兵士もしくは非公然支援員が公然支援活動を行なうために敵の前に姿をさらけ出してしまふのはまずいので、匿名の組織工作員として、既成の合法的救援組織に送り込み、救対活動を担うような配慮が必要である。）

日帝本国人としての歴史的、現在の反革命性の実践的自己否定をバネとした反日武装闘争への主体的“志願Ⅴ”、被植民地人民の反日、反世界帝国主義闘争を受け止めて日帝中枢を撃つ“呼応Ⅴ”、そして“呼応Ⅴ”する事実行為による被植民地人民との“合流Ⅴ”、この“志願Ⅴ”——“呼応Ⅴ”——“合流Ⅴ”こそ、世界革命“狼”軍Ⅴ創出に向けた、われわれの戦略的組織路線である。

(2) “狼”部隊（前史——74.8.30——75.5.19——）の組織的境界

1 “狼”部隊の組織構造

“狼”は、兵士のための単一的戦闘部隊であり、非公然支援部隊を形成していなかった。それ故、“狼”は、それ自体が戦闘部隊であるとともに、同時に兵站線・支援部隊の役割（武器の製造、保管、戦闘・生活資金の捻出と保管など）を自力で果たさねばならず、市民社会での日常の住居が、同時にアジト・工場・倉庫・出撃拠点であった。

“狼”が、△戦闘部隊——非公然支援部隊Ⅴという組織陣型を構築した後で、それぞれの持ち場——領域、任務、役割をはっきりと分けた上で、相互に支えあつて戦闘を開始するのではなく、単一的戦闘部隊のみであつても戦闘を開いたのは、待機主義の否定と、まず戦闘実績を重ねた上で、しかるのちに、その戦闘実績をテコとして、非公然の支援部隊を構築していくと考えたからである。

2 “狼”部隊の組織拡大方法

△戦闘部隊——非公然支援部隊Ⅴという組織陣型を構築し得なかった“狼”にとつては、“狼”自身が担う具体的な都市ゲリラ戦としての反日武装闘争の遂行、そして連続的に日帝中枢を攻撃し、勝利する事実行為こそが、末だ反日武装闘争に決起できていない同志や友人にインパクトを与え、決起を促すと考えた。

つまり、“狼”の戦闘行動と、それに呼応する後続部隊

の出現により、直接的、実体的には結合できなくても、共に日帝中枢を攻撃する事実行為で結合し、共闘し得ると考えたのである。“狼”自身の直接的、実体的な兵士の補充、組織拡大は、当面、“狼”の各兵士の個人的人間関係を掘り起こすことであり、それは、戦闘部隊である“狼”自身が、戦闘と併行して、担わざるを得なかった。

3 “狼”部隊の隊内主体形成

“狼”は、日帝本国人としてのオノレの歴史的、現在の反革命性を日帝中枢を攻撃する事実行為で自己否定し、日帝を根底から打倒し尽し、世界革命へと向かう主体へと自己を形成しようとした。つまり、オノレの歴史的、現在の帝国主義本国人性である、侵略者性・支配者性・寄生虫性を自覚したうえで、そうしたオノレに居直らず、逃避せず、そして観念的で自己満足的な自己否定運動（何ら敵に物質的ダメージを与えない、攻撃性を持たない、サロンの偽善的なおしゃべり）でごまかさない、日帝中枢を攻撃する実践的自己否定によってオノレを世界革命主体へと形成せんとしたのである。そして、“狼”の戦闘行動の根源、攻撃性の生命は、個々の兵士の反日武装闘争に志願する内発力にあった。

(3) 75・5・19 三部隊八名の被逮捕弾圧は避けることができた

1 74・8・30(三菱重工爆破)から

わずかに八ヶ月余で逮捕された原因

この設問は、「狼」はなぜ、公安秘密警察にマークされていたNを地下に潜らせなかったのか、と総括されねばならない。

「狼」は74年初頭『腹腹時計』を公表し、そこで「狼」結成以前の戦闘実績を踏まえつつ、公表後の「狼」の戦闘を前提としたうえで、反日思想——反日武装闘争を提起した。この段階では、未だNは「狼」の組織的活動を担っていないので、『腹腹時計』の公表が敵につけ入る隙を与えることになることは、「狼」は考えなかった。

『腹腹時計』の公表後、Nは東アジア反日武装戦線に志願し、「狼」の兵士として、その組織的活動を担うようになった。Nは、「活動歴(被逮捕歴など)」、「人間関係」、「思想傾向」などから公安秘密警察にマークされる可能性が大きいと考えられたが、「狼」はNを地下に潜らせるのではなく、他の兵士と同様に、公然と本名で戦につき、生計を立てるように決めた。なぜか? 「狼」は当時、①公安秘密警察の力を過小評価していた、②非公然支援部隊を持たない組織構造のため、Nを潜らせることが困難であったからであり、74・8・30以後においては、③自らの戦闘が創出した客観的状況を正しく把握し、的確に対応し得な

いという主体の立ち遅れがあったからである。

「狼」は、公安秘密警察の力を過小評価していたため、奴らのNに対するマークを軽視、あるいは無視し、他の兵士がこれまで非合法非公然活動を行ないつつ、「安全圏」に身を置いてきた実績を踏まえて、Nも同様の生活スタイルをとることに固執した。そして、非公然支援部隊を持たない「狼」にとつて、Nが潜るのが一時的なものならば組織を維持していくことはできるが、長期的には困難であり、長期にわたって地下のNを支えていくことは、「狼」の戦闘能力を減じてしまう、と判断せざるをえなかった。それ故、「狼」は、Nが公安秘密警察にマークされた場合の対策として、Nが創価学会に加入して、公然と「宗教活動」を行なうことによつて、Nの「ブル転」を奴らに認めさせ、Nへのマークをかわそうと考えたのであった。そしてさらに、「狼」は、反日武装闘争が敵に与えた衝動の大きさ、それ故の敵の捜査弾圧体制の質・量ともの大きさを十分に考慮することができなかった。つまり、東アジア反日武装戦線三部隊の戦闘が創出した客観的状況——敵の危機意識の増大とそれ故の捜査弾圧体制の強化は、『腹腹時計』を公表した74年春の時点、そして、三菱重工爆破の74・8・30以前の「狼」の主観的推測を超えたものであったのである。

それでも「狼」は、74・8・30の後(74・10・14の三井物産爆破の後には特にそうであるが)、公安秘密警察が大々

的な捜査を開始し、『腹腹時計』を分析して「反日・アイヌ・朝鮮」などをキー・カテゴリーとして抽出して追求を始めたことを確認した時、あらためてNがマークされる危険があると判断した。そこで、「狼」は再度、Nが潜ることを検討したが、「いま潜れば、Nがゲリラ兵士であることとを奴らに教えてやるようなものだ」という考えから、表面上、Nが、従来以上に「宗教活動」に力を入れ、職場や住居での小市民ぶりを徹底化することによつて、敵の追求をかわそうと結論したのである。

しかし、公安秘密警察は、74年暮れから、Nを具体的にマークし、75年初頭には、定点監視(職場附近と住居附近の二カ所)を含む厳密な尾行を開始した。「狼」は、Nが「狼」の組織的活動を担い始めた74年春の段階で、次に74・8・30以後の段階で、Nを潜らせないことによつて、明らかな誤りを犯したのである。

公安秘密警察の捜査能力を甘く見てはならない。奴らは、われわれの表面上の生活にまどわされることはない。奴らは、われわれが経済的のみならず、思想的にも「ブル転」しても(つまり、Nのように創価学会に加入して活動しようとも)、奴ら自身がわれわれを絶対にゲリラ兵士ではない、という確信を持つまでは執拗に追尾してくる。そして、奴らは平気でデッチ上げをやる奴らなのであることを、われわれは、一瞬たりとも忘れてはならないのだ。

以上のことから、われわれは次の二点を教訓として明らかにすることができようであろう。

① 敵に実体を知られてはいないゲリラ部隊が、非合法地下出版物を発行する場合、その内容には細心の注意が払われなければならない。いささかも、その出版物の発行によつて、敵につけ入れられる情報を与えてはならない。この点、「狼」は、『腹腹時計』で細心の注意を怠り、敵に情報を与えすぎて、オノレの実体を一部分明らかにしてしまひ、敵にNへの追求の糸口を与えるという誤りを犯した。

② 一度敵にマークされた者がゲリラ戦を開始する場合、奴らの視界から完全に姿を消すこと、いささかのためらいもなく地下に潜ることが鉄則である。もし一人だけの場合、あるいは数人だけの結集しかない場合、一人でも地下に潜った状態で戦闘を遂行するということは困難なことである。しかし、その困難さをはっきりと認識したうえで、なおも戦闘を遂行しようという強い情熱と戦闘性を持つていならば、必ず戦闘を持続していくことができるであろう。

われわれは勝ち続けるために、勝利的に戦闘を持続し抜くために、八戦闘部隊——非公然支援部隊Vという組織陣型の構築を全力を挙げて追求しよう。この組織陣型が構築され、戦闘部隊と非公然支援部隊が強い信頼のもとでおたがいに支え合つて機能する時、われわれは都市ゲリラ戦としての反日武装闘争を、確実に拡大し、発展させていくこ

とができるのである。

2 被逮捕を「狼」のみにとどめ得ず、

三部隊八名もの被逮捕を許した原因

「狼」は、75年2月初旬、Tが尾行されていることに気づいた。「狼」は警戒を深めたが、その尾行している奴らを三部隊を捜査している公安秘密警察のイヌとは判断せず、そしてTに尾行がついた原因を徹底的に追求することを怠った。なぜか？

それは「狼」が、①公安秘密警察の力を過小評価して警戒心を欠いていたからであり、②非公然支援部隊を持つておらず、単一的戦闘部隊という組織構造に規制され、全員が地下に潜るという最悪の事態を回避したいという強い願望があったからである。Tは過去の被逮捕歴、公然活動歴から新左翼活動家と見なされる可能性はあっても、「狼」の兵士と見なされる理由は考えられなかった。それ故、「狼」は、Tが住んでいる地域が革共同両派による「内ゲバ多発地域」であったため、Tがその一方の活動家としてマークされたのであろうと考えたのである。その判断はまた、Tを尾行した奴らがTに密着したり、Tの後をバタバタと走り尾けるという稚拙な奴らであったこと、そして体格、服装、持ち物がイヌそのものであったため、公安秘密警察のイヌとは考えられなかったことに、支えられた。そして、「狼」は、Nが尾行されていることには気づかなかった。

化する必要があることから、三部隊の連絡会議が設定されることになった。この時、「狼」の連絡員であったPは、N↓T↓Pとイモヅル式にきた公安秘密のイヌを、三部隊連絡会議に連れていき、「大地の牙」、「さそり」の連絡員であったK、Eの存在をイヌどもに知らせ、追尾を許してしまったのである。

「大地の牙」、「さそり」にまで被逮捕弾圧を拡大してしまっただけは、直接的には「狼」の連絡員であったPの警戒心の欠如にあった。そして組織的には、非公然支援部隊をもたない「狼」は、敵にマークされる危険性の高いNを潜らせることができず、Tが尾行されていることに気づいた後でも、いっさいを投げ棄てて全員が潜るという決断がつかなかったからである。だから兵士であるPが、すでにTに尾行がついているという危険な状態の中で、連絡員として動いて、「大地の牙」、「さそり」にまで被逮捕を拡大してしまっただけである。

「狼」が、Tが尾行されていることを確認した時、先ず何よりも考えなければならなかったことは、「狼」の兵士全員が地下に潜ることによって、「狼」の戦闘を停止せざるを得なくなることを危惧することではなく、「大地の牙」、「さそり」の兵士たちへ被逮捕の危険が拡大することを防ぐことであった。後続する反日武装闘争に確信をもって、否、反日武装闘争の継続・発展のためにこそ「狼」は速や

それ故、Tの尾行が、Nからイモヅル式に波及したものであると考えることができず、Tに限定したものであると考えたのである。

非公然支援部隊を持たなかった「狼」は、各兵士の市民社会での住居を、アジト・工場・倉庫・出撃拠点として活用せざるを得なかった。そのため、全員が地下に潜らなければならぬという最悪の事態になれば、それは単に市民社会での住居を棄てるということではなく、戦闘部隊の中核拠点、兵站線の一切を棄てることを意味していた。このことは、「狼」が長期にわたって戦闘を停止しなければならぬということであった。「狼」は、こうした事態になることを回避したかった。しかし、「狼」が考えねばならなかったことは、「狼」の地下潜行は一時的な戦術的退却であり、そのことによって当面の危険を回避し、三部隊の戦闘によって切り拓いた戦術的攻勢を維持しなければならぬということであった。が、「狼」は、一時的な戦術的退却があたかも戦術的退却であるかのごとくに思い込み、地下潜行の決断を下せなかったのである。

「狼」は、こうした判断の誤りによる長期にわたる戦闘の停止を避けたいという願望によって、Tへの尾行を開始したイヌを三部隊を捜査している公安秘密警察のイヌではないと考えたのである。

75年初頭、前年の三部隊の戦いをさらに集中化し、連携

かに地下に潜るべきだったのである。

すなわち、「狼」は客観的には戦術的攻勢を維持するために戦術的退却が問われている時に、戦術的退却があたかも戦術的退却であるかのごとくに思い込んで、戦術的退却つまり、地下潜行の決断を下せなかったのである。

75年2月初旬、「狼」はTが尾行されていることを確認した段階で、すみやかに戦術的退却を果たすべきであったのであり、少くとも戦術的退却をすることなく三部隊連絡会議に直接出席することは中止するべきであった。

この「狼」の判断の誤りこそ、三部隊八名もの被逮捕を招いてしまったのだ。

3 準戦闘員であったMの被逮捕を許した原因

「狼」は、74、75年当時、地方の専門学校学生であったMを、戦闘員として迎え入れて実体的に結合することしなかった。なぜなら、Mが他の兵士たちと同様に、本名で定職について生計を立てながらゲリラ戦を担っていくためには、学校を中退して、東京に出てくるよりは、学校を卒業して、専門職の資格を得た方が、経済的にも社会的にもよい、という長期的展望のもとに判断したからであった。それ故、Mは、74、75年当時、日常的にも、戦闘時においても「狼」と行動を共にしていない、近い将来の兵士であり、準戦闘員という性格であったということができる。

「狼」は、近い将来の兵士であるMの身の安全を守るこ

とが求められていた。しかし、時々Mと直接に連絡をとり合い、直接に往來することによって、「狼」に尾いていたイヌどもをMにまで拡大してしまったのである。近い将来の兵士であったMにまで被逮捕弾圧を拡大してしまったことは、「狼」が、戦闘部隊としての本来の任務である具体的な都市ゲリラ戦の遂行にとどまらず、兵站も情宣も、兵士の補充も、全部をやらなければならないという組織構造上の欠陥に規定されていた。つまり、戦闘領域と非戦闘領域を分岐していないが故に、いったんもし一人にでもイヌの尾行が開始され、その尾行に早期に気づかなかつたり、気づいてもその対応方法を誤るならば準戦闘員、友人たちにまで被逮捕弾圧を拡大してしまうのである。

「狼」は、75年2月Tが尾行されていることを確認した段階で、Mを防御するために、Mとの直接の連絡、往來は中止すべきであった。このことによって、意見の交換がスムーズに運ばず、時間がかかったとしても、「狼」はMを防御することこそが問われていたのである。

同志、友人を敵の弾圧から防御するという思想、そして実際に防御し抜くことによって、戦いの永続性、戦いの前進を道義的にも、物質的にも保障していく。したがって、われわれは、同志、友人を防御するための物質的根拠として、△戦闘部隊——非公然支援部隊▽という組織陣型を可能な限り構築しなければならない。

なっていたのである。

75・5・19、三部隊八名の被逮捕。Tは5・19直後から急速度で転向を深め、イヌデカ、イヌ検事と相談つてオノレ一人のみの延命を追求するという完全転向をなし遂げた。

75・7・21、東拘への移監日。Tは、護送のイヌデカとの別れを惜しみ、奴と握手をして涙を流すほどに完全転向者であった。

77・5・19。東拘移監後Tは、同志、友人にオノレの完全転向の事実を隠し続けることによって本質的に完全転向者であり続けたが、77・4に獄外の友人からの質問と批判を受けて、完全転向の事実の切開を始めた。しかし、三年目の5・19にこの日は、われわれにとっては反日兵士への再起と、反日武装闘争の決意を打ち固める日に他ならないのだ、Tはそれまで進めていた完全転向からの離脱、克服の作業を放棄し、東アジア反日武装戦線からの逃亡を宣言した。

77・12・12。Tは自白の日々をパンフにして公表し、自白転向を克服して、反日兵士へと再起すると宣言した。このパンフは不十分性はあるものの、確かに自白の日々の開示であり、Tが完全転向者の地点からは脱したことを明らかにするものであった。しかし、5・19に発した逃亡宣言の自己批判的総括はなく、反日武装闘争に対する生き生きとした確信も見られないなど、Tの反日兵士への再帰はま

(4) 「狼」が転向者Tを生み出し、内包し続けたことに対する自己批判

1 Tの転向過程(74・8・30——75・2・28——75・5・19——75・7・21——77・5・19——77・12・12——現在)

74・8・30の三菱重工爆破攻撃の結果は、「狼」の予測をはるかに越えたものであった。多数の通行人を殺傷してしまったことに、「狼」は総体として動揺した。しかし、動揺はしたが、反日武装闘争を主体的に持続する決意は揺がぬものであり、8・30の技術的失敗の確認と総括ののち、日帝中樞に対するさらなる攻撃の続行を確認した。反日武装闘争の続行こそが、殺傷してしまった通行人に対する、「狼」部隊の責任の果し方であった。

がしかし、Tは、8・30の結果から反日武装闘争の遂行に懐疑的になり、否定していくようになった。

75・2・28間組本社中樞等三ヶ所同時爆破攻撃の際、Tは、すでにイヌに尾行されていることが確認できたため、戦闘からは一歩離れたところにいたが、本社9Fコンピュータ室で間組社員一人が負傷したことをもって、この戦闘を批判した。Tにとつては、死傷者を出すか出さないかが問題になっており、負傷者を出した2・28間組攻撃は、批判の対象でしかなかったのである。つまり、この時点でTは、象徴主義的暴露糾弾の質を越えた、中樞セン滅の質を持った反日武装闘争に対してはつきりと否定的態度に

だなされていない。

現在。77・12・12パンフ公表後、Tは完全転向者の地点からは脱し、各種集会やメディアにアピールや投書を送ったが、その内容は、Tが反日思想、反日武装闘争に懐疑的な立場に立っていることを示しており、Tの反日兵士への再起は勝ち取れていない。

2 各段階での「狼」の対応とその限界

74・8・30直後、「狼」は、三菱重工爆破攻撃の戦術的失敗を、単に技術的失敗としてしか総括し得ず、失敗の心理的動揺を組織的に克服するのではなく、個々の兵士の心理的克服にまかせた。それ故、「狼」は、Tの動揺の深さを組織として理解し得ず、組織として共有し、克服することができなかったために、Tの反日武装闘争への懐疑と反日武装闘争を否定していく傾向を打ち破ることができず、Tの転向を阻止し得なかった。

75・2・28直後、Tの中樞セン滅的反日武装闘争への否定的態度に対して、「狼」は、Tに尾行がついていたことからTとの日常的接触を避け、Tとの討論が希薄になっていったということがあったものの、即座に批判することができず、Tの反日武装闘争に対する清算主義的傾向を放置してしまった。

75・5・19／7・21。「狼」は、被逮捕とともに組織性をほぼ解体してしまい、Tの完全転向を何ら阻止しえな

った。

77・5・19。われわれ（東拘移監後三部隊は統一的に討論を進めてきており、この段階では「狼」・「大地の牙」・「さそり」という区別性はない）は、Tが3年目の5・19に東アジア反日武装戦線からの逃亡宣言を発し、77・4から開始した完全転向の事実報告、切開の作業を放棄してしまったことをもって、未だTが完全転向者であると判断し、Tが内包し続けている完全転向者の質を粉碎し、Tを反日兵士へと再起させるべく、根底的な批判を開始した。しかし、われわれの組織性とTを立ち直らせ再結合せんとする決意が不十分であったために建設的な批判として展開することができなかった。

77・12・12。われわれは、Tのパンフの公表後、Tの完全転向の地点からの主体的離脱の積極的努力を認めて評価し、そのうえで不十分な点を批判すべきであった。しかし、特に77・5・19の逃亡宣言以降のTに対する不信と、「批判・発問——応答」の中で感情的反発の故にわれわれは、結果としてTのパンフを黙殺する態度をとるという誤りを犯した。

現在、われわれは、12・12パンフ公表によって、Tが明らかに完全転向者の地点から離脱したことを認め、Tに対して完全転向者規定を維持してきたことを自己批判的に撤回し、その上で、Tとともに戦い抜く関係の構築、共に確

信をもって反日武装闘争を担い得る関係の構築に向けて努力していこうと決意している。

3 限界の思想的根拠

完全転向に至るまでTを放置しておいたこと、TとともにTの動揺の深さを共有し、組織的に克服し得なかったこと、これは「狼」の組織的な思想性の矛盾、組織性の弱さの結果である。

「狼」は組織総体として、反日思想を観念的にしか獲得することができず、真に主体化し得ていなかった。

反日思想は、帝国主義本国人であるオノレの歴史的、現在の反革命性を自己否定し、日本帝国主義・世界帝国主義の反革命思想と対決して、オノレを革命主体へと変革成長させる革命思想である。そして、この反日思想に従って、日帝の歴史的、現在の反革命史を粉碎する質を内包する、具体的に現在の日帝中枢を撃つ反日武装闘争を主体的に担うことによって、反革命的存在の日帝本国人を革命的存在「革命主体」へと形成していく普遍的な解放思想なのである。しかし、74・8・30当時の「狼」は、反日思想——反日武装闘争の、こうした革命性をしっかりと主体化しえず、あたかも日帝本国人総体が帝国主義者であるかのごときアイマイさを持っていたが故に、三菱重工の中枢機能を攻撃するのではなく、大きな爆弾を、白昼、路上に設置するという戦術的失敗を犯したのである。つまり、この戦術的失

敗は、「狼」の反日思想の観念性が惹起したものであったのである。

このように、この予想を越えた8・30の結果が、「狼」の組織総体の思想性を根底的に問うものであったけれども、当時の「狼」はそのことに気づかず組織的にきちんと総括することができなかった。それ故、単に技術的失敗としてのみ総括し、個々の兵士の心理的克服にまかせただけで、組織的に思想的に克服し得なかったが故に、Tの転向を放置してしまったのである。そして、このように観念的にしか反日思想を獲得し得ていなかったが故に、「狼」は75・2・28の戦闘に対するTの懐疑に対しても原則的に批判し得ず、そのことによってTの転向を促進するとともに、「狼」の組織総体の思想性をアイマイなままに維持し続けたのである。

オノレの歴史的、現在の反革命性を自己否定し、日本帝国主義者、世界帝国主義者に対する非妥協的な憎悪に裏打ちされた戦闘意志を確固なものとする反日思想を「狼」が組織総体として主体化し得ていなかったこと、そしてその主体化に向けた隊内思想闘争の軽視が、Tの転向と、被逮捕直後の完全転向を生ぜしめた思想的根拠であった。

被植民地人民の解放を最優先に追求し、世界革命主体の形成に向けて日帝本国人であるオノレの歴史的・現在の反革命性を日帝中枢を撃つ実践によって自己否定していく

反日思想の目的意識的な深化を、個々の兵士間において、そして組織総体として徹底化する隊内思想闘争の展開こそが、Tを完全転向に追いやった、「狼」の思想的不十分性、アイマイさを克服できるのである。

4 限界の組織的根拠

「狼」は、組織的な強制力のある部隊規律を持たなかった。「狼」は小規模な組織であり、それ故、隊内民主主義の徹底化によって、部隊規律は維持できると考えたし、個々の兵士の自己規律によって、「狼」の部隊規律、行動綱領は代行されうると考えたのであった。

「狼」は、その行動の根源を、個々の兵士が東アジア反日武装戦線に志願し、日帝中枢を攻撃するという戦闘的内発力、すなわち、他からの強制によるものではない個々の兵士の主体的決意に依拠していた。「狼」は、このような個々の兵士の主体的決意に依拠した戦いの遂行によって、自然成長的に個々の兵士が革命主体へと鍛え上げられ、その鍛え上げられる過程で、共産主義的（戦士的）共同性を形成できると考えたのである。それ故、「狼」は、兵士個々を相互に鍛え上げ、信頼関係を強固にするためのテコである自己批判——相互批判、自己点検——相互点検を組織的に実践しなかった。つまり、「狼」は、戦いの遂行過程で自然成長的に個々の兵士が鍛え上げられ、「狼」自身も鍛え上げられる、と考えたが故に、自己批判——相互批判、自

己点検——相互点検は、その必要がないかのごとくに考えて、まったく不十分にしかなし得なかったのである。また、隊内民主主義の徹底化は、単に官僚的組織論の否定にとどまった。こうして個々の兵士の自己規律にすべてを委ね、隊内思想闘争を軽視した「狼」は、個々の兵士に矛盾が生じて、全体でその矛盾を共有して切開し、克服しようとするのではなく、矛盾を抱え込んだ兵士自らが、その矛盾に気づき、自ら克服するにまかせて、組織的には放置してしまうことになった。これは個々の兵士の甘え、行動の厳格さの欠如を助長し、組織的緊張を減じ、和気あいあいとしていることがあたかも組織的な余裕であるかのごとくに錯覚して、都会的（個人主義的）自由主義をはびこらせ、組織的な、または個々の兵士の内部での小さな矛盾をも、克服しないまま放置して、根本的な大きな矛盾へと拡大させていくことになったのである。Tが陥った矛盾を見抜けずに放置し、Tを完全転向に追いやった組織的根拠は、こうした「狼」の組織性のなさによる隊内思想闘争の軽視であった。

些細な誤りや失敗が、オノレはもろんのこと、同志や友人の死をもたらし、あるいは被逮捕につながるゲリラ部隊にあつては、組織的にも、個々の兵士においてもどんな些細な誤りや失敗も決して見逃さないことが、戦闘を持続させるための核心である。自己批判——相互批判、自己点検——相互点検を実践し、相互に日常生活、任務活動を点検し合い、鍛え上げてい

くことによって、（そしてこのことが、お互いの信頼を強固にするのだ！）連続的、永続的な勝利を保障するのである。

「狼」が組織総体として反日思想を主体化し得ていなかったこと、そして組織性のなさによる隊内思想闘争の軽視が、Tを完全転向に追いやったということを自己批判しなければならぬ。

(5) 全員が自白敗北したことの組織的根拠

前段(4)の3、4において展開したように、組織総体として反日思想を主体化しておらず、革命主体へと自己を形成し得ていなかったこと、これが第一の根拠である。次に、目的意識的に相互に鍛え上げるという隊内思想闘争の軽視から、共産主義的（戦士的）共同性を構築することなく、仲良しグループ的、家族主義的「共同性」しか構築し得ず、物理的に個々に分断されることによって、組織性を解体してしまつたこと、こうした組織性の弱さ、欠如が、第二の根拠である。

そして第三の根拠は、反日武装闘争の勝利の確信に基づいた被逮捕後の方針と展望の無設定、欠如である。

「狼」は、逮捕された場合には、カプセルを服用して自殺し、他の兵士・部隊への被逮捕の拡大を防ぐということをも唯一の組織的方針として設定した。

すなわち、「狼」は反日武装闘争の勝利と、新たな反日兵士、部隊の出現、後続決起を確信し得なかったが故に、被逮捕は敗北であり、戦いの終わりであるという敗北主義に陥り、カ

プセルを服用して自殺することによって組織防衛をはかるという根本的に誤つた組織論に立っていたのである。

反日武装闘争の勝利と後続する反日兵士、部隊の出現に確信を持ち、逮捕されたならば獄中でクソブタどもと闘い抜き、しぶとく生き抜き、その事実行為で継続・後続する獄外の反日武装闘争と呼応、結合して反日武装闘争を前進させていくという、被逮捕後の方針と展望の無設定、欠如、これが組織的な自白敗北の第三の根拠である。

「狼」の被逮捕、そして自白敗北は、「狼」の組織的限界、不十分に起因するものであるが、しかし、このことは、「狼」には「党」がなかったからとか、「狼」は戦闘を急ぎすぎたからということの意味しているのでは断じてない。「狼」の敗北の総括・教訓として、「党」がなかったから敗北した」「党」を形成しなければならぬ」「戦闘を急ぎすぎたはならない」と結論し、戦闘を先に先に延ばし、緊急に戦わぬことを正当化し、待機主義を肯定するのは絶対に誤っている。そうではないのだ。

一人でも数人でも戦えるのだ。そして勝利し続けることもできるのだ。そしてなお、「狼」のように単一的戦闘部隊ではなく、非公然支援部隊が形成し得ればよい条件で戦え、さらに目的意識的に組織性を強化し得れば、困難に遭遇しても、組織的に克服することができる、ということなのである。戦闘部隊だけであれば戦えないのでは断じてなく、要は、有利な条件で戦えるか否かであり、組織性が鍛

え上げられて強いのかどうか、重要なのである。

また「狼」が戦闘を急ぎすぎたことが敗北につながつた、というのはまったくの間違いである。なぜなら、「狼」の戦闘のインパクトこそが次々と新たな反日兵士、反日部隊を生み、日帝中枢への連続的攻撃を生んだのであるから。問われていることは、待機主義、日和見主義を排してすみやかに日帝中枢を攻撃し続けることであり、そして、その戦闘性をそこなうことなく、公安秘密警察を尖兵とする敵につけ入る隙を与えない組織陣型の構築ということなのである。

世界革命主体へと個々の兵士、組織総体を鍛え上げていくのは、何よりもまず具体的な戦闘実践——原始共同体原住民、被植民地人民の苦闘に想いを馳せ、彼らの解放を最優先し、常に彼らの立場に向けて自己否定し、彼らの日本帝国主義、世界帝国主義に対する憎悪を心の核心に据える反日武装闘争の遂行——である。われわれは、この戦闘実践のたびごとに、日本帝国主義者、世界帝国主義者どもへの非妥協的な憎悪を組織としての戦闘意志へと高め、そして勝利に至るプログラムを組織的に提起し、それを実践的に検証・確認し得る時、個々の兵士、組織総体が、勝利の確信を主体化し、戦闘を持続し得るのである。この時、反日武装闘争は休むことなく前進し、敵を撃ち、味方を強化する勝利の弁証法を確固として展開し得るのである。